

意見文における中国人日本語学習者の文章観についての一考察 —中国の議論文に焦点を当てて—

A Study on Chinese Learners of Japanese's Views on Good Writing of Argumentative Essays: From the Perspective of Chinese Argumentative Essays

肖 宇彤
XIAO, Yutong

摘要

Studies indicated that argumentative essays written by Chinese Learners of Japanese tend to be incomprehensible. In order to disentangle the factors contributing to that phenomena, most of the existing literatures mainly pay attention to the constitution or contents of the essays. However, in China there is no genre exactly the same as argumentative essays of Japanese, which I call Japanese argumentative essays. After investigating the genre in China corresponding to Japanese argumentative essays, I find that the incomprehensiveness of argumentative essays written by Chinese learners of Japanese is related to their view of good writing on Chinese argumentative essays.

キーワード： 中国人日本語学習者 意見文 議論文 文章観

Keywords: Chinese learners of Japanese, Japanese argumentative essays, Chinese argumentative essays, views on good writing

1. はじめに

水谷（1997）では、日本語教育学会によって発行されている『日本語教育』⁽¹⁾における1990年代までの作文に関する研究の中で、外国人学習者の作文に表れた表現能力を問題にし、とくに誤用を取り上げたものが多いと指摘されている。また、近年、日本語学習者の文章における文章構成・文章構造についての指摘や文章レベルのわかりにくさについての指摘が多くなっている。このように、従来の日本語学習者によって書かれた文章に関する研究は学習者の文章における不足点について指摘している内容が多い。

その中で、脇田（2005:1）では、「日本語学習者の文章には、学習者の母語文化のアカデミック・ライティングの習慣、スタイルに影響され、非日本的な文章構造を産出する問題がある」と述べられている。木戸（2020:2）は、日本語学習者の文章には、「文法のまちがい、不適切な

語の選択など誤用の多い意味不明の文章だけではなく、何を言いたいのかよくわからないようなまとまりのない文章、あるいは、語や文法の誤用はないのに意味不明の文章もある」と述べている。そのような文章について、吉田（2004）では、学習者が母語の学校教育などで学んできた文章に対する考え方と日本人が考える「良い作文」との間に相違がある可能性があると指摘されている。

中国人日本語学習者（以下、中国人学習者）を例にすれば、彼らにとっての「良い作文」は日本語母語話者にとっては「良くない作文」であると認識している可能性が十分あると言えよう。したがって、中国人学習者が持つ文章観と日本語母語話者の文章観の間はギャップがあると考えられる。とくに「意見文」に着目した場合、日本では「意見文」という文章ジャンルが存在しているが、中国では「意見文」という名付けられた文章ジャンルはない。

では、中国では「意見文」と対応する文章ジャンルは何なのか。その文章ジャンルにおける文章観は意見文の文章観と異なるのか。もし異なる場合、その文章ジャンルの文章観から影響を受けた場合、中国人学習者の意見文に対する文章観は中国人学習者なりの特徴が出てくるのではないだろうか。その場合、中国人学習者の中にある「良い意見文」と日本語母語話者の「良い意見文」との間に当然ギャップが生じると考えられる。

そこで、本研究では、「意見文」に対応する中国の文章ジャンルは何かを明らかにした上で、中国人学習者の特有の文章観があるかを解明し、彼らによって書かれた意見文がその文章観からの影響を受けているかを検討することを目的とする。

2. 「意見文」に対応する中国の文章ジャンル

日本の「意見文」は中国の「議論文（议论文）」とほぼ同じ文章ジャンルであるという認識が先行研究で散見される。大野（2019）では、中国の語文⁽²⁾教科書における議論文は日本の意見文であると指摘されている。前川（2020）では、中国人学習者に意見文を与え、その文種を判断してもらった結果、「議論文」であるとの回答も多く見られたと述べられている。また、黄（2018）では「日本議論文（日本议论文）」という言葉を用いて「自分の論題・観点・態度・見方・主張」を述べる日本語の作文の指導について検討されている。つまり、日本では「意見文＝議論文」、中国では「議論文＝意見文」という認識がある。では、中国人学習者は意見文をどのように認識しているのだろうか。実際の書き手としての中国人学習者の認識⁽³⁾の解明は彼らの意見文を書く際の文章観の分析に役立つと考え、アンケート調査を行った。

(1) 【認識調査】の概要と調査用紙

表 1 中国人日本語学習者の意見文に対する認識調査の概要

	機関 A ⁽⁴⁾	機関 B ⁽⁵⁾
時期	2015 年 3 月	2016 年 9 月
対象 ⁽⁶⁾	中国の機関 A の外国語学部で日本語を専攻している 2 年生 29 名, 3 年生 28 名	中国の機関 B の外国語学部で日本語を専攻している 3 年生 14 名, 4 年生 13 名
調査形式	アンケート用紙による選択肢問題及び自由記述	

調査用紙の作成の際に、「意見文」⁽⁷⁾は中国に存在しないことを配慮し、「意見文」について聞いたことがあるか否かを確認する設問を設定した。また、「意見文」を聞いたことがあるか否かにかかわらず、「意見文」とは何かについて学習者の考えを聞くために、「意見文とは何かを直感で書きなさい」との設問を設けた。調査用紙の設問は以下のようになる。

設問①（選択肢問題）：「今まで意見文について聞いたことがあるか」
 あ. 聞いたことがある
 い. 聞いたことがない
 う. 聞いたことはあるが具体的にとは何かがわからない。
 設問②（自由記述）：「意見文とは何かを自分の考えを書きなさい（調べないで直感で書いてください）」

(2) 【認識調査】の結果

表 2 設問①について各選択肢を選んだ被調査者数

回答	機関 A		機関 B		合計	割合
	2 年生	3 年生	3 年生	4 年生		
ア	9	3	12	5	29	36%
イ	16	19	1	0	36	44%
ウ	4	6	1	5	16	20%
合計	29	28	14	10	81	100%

表 2 から、「イ. 聞いたことがない」を選択した被調査数が 36 人で最も多かった。その点から、被調査者の中には「意見文」についての認識を持っていない人が少なくないと考えられる。

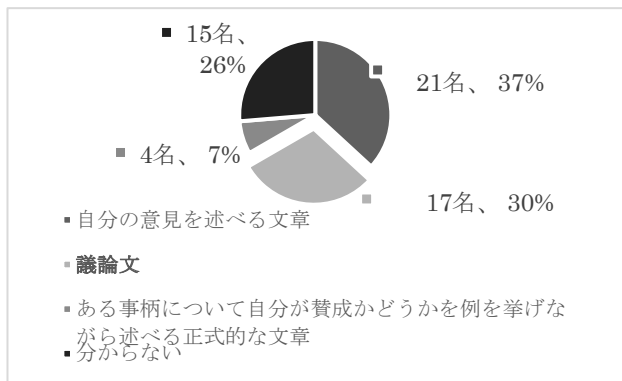


図 1 設問②についての回答（機関 A）

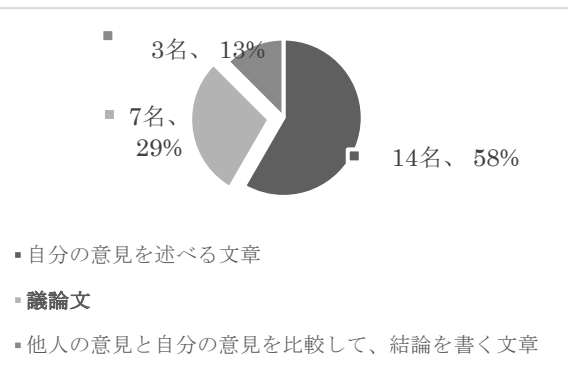


図 2 設問②についての回答（機関 B）

図 1、図 2 を見ると、機関 A の 37%の被調査者と機関 B の 58%の被調査者が「意見文」とは「意見を述べる文章である」と回答している。つまり、被調査者の学習者は「意見文」について一定の理解ができていることがわかる。また、「意見文」とは「議論文」とを同じ文章ジャン

ルだと認識している被調査者も機関 A は 30%、機関 B は 29%を占めている。さらに、「意見文」とは何かが全くわからない被調査者の割合は 26%で少なくないことがわかった。

一方、この調査結果では、未解決の課題が 3 つ残る。まず、「意見文」の認識を持っている中国人学習者であれば「良い意見文」が書けるのか。また、「意見文とは何か」を考えても思いつかない中国人学習者の意見文はどう指導すればいいのか。さらに、「意見文」に対応する中国の文章ジャンルは「議論文」とであるという認識を持っている被調査者が 30%程度存在しており、半数は超えていないものの、何も指導しないわけにはいかない。「意見文」を「議論文」として認識することが妥当であるかを確認する必要があると考える。

以上の解明は中国人学習者の文章観の解明の一助になると考える。本研究では、その中の「意見文＝議論文」という認識の妥当性についての検討を入り口とする。

3. 「議論文」における文章観

鈴木・内川（2013:18）は、「国語科で培った能力を論理的な表現を伴う学習活動に結びつけるためには、作文、特に論理性を必要とする意見文を中心とした指導を行うことにより、生徒の論理的思考力を育てることができることになる」と述べている。そこから、「意見文」は日本人学生の論理的思考力を育てるための論理性のある文章ジャンルであると言えよう。他方、紀・李（2016）では、独立的な思考力と理性的な思考力を選抜するため、「議論文」を（高考^⑧で）出題しないといけないと述べられている（筆者直訳）。そこから、「議論文」は中国人学生の理性的な思考力を育てるための文章ジャンルであると言えよう。

以上から、「意見文」と「議論文」は学生の論理的または理性的な思考力を育てるという目標の点で似ている文章ジャンルと言えるであろう。ただし、ここでの「論理的」と「理性的」をさらに詳しく見てみると、「論理的」とは「きちんと筋道立てて考える様子」であり、「理性的」とは「本能や感情に走ることなく、冷静に判断して行動するさま」であって、微妙な違いがある。しかし、それだけでは「意見文＝議論文」という認識が妥当ではないとはいいきれない。

次に「議論文」における文章観がどのような特徴を持っているかを検討していきたい。

3. 1. 「文章観」をどう捉えるか

「文章観」という言葉を字面から解釈すると「文章に対する見方」になるかもしれないが、村井（1999:27）では「文章観」の内実を以下のような問いに砕いて具体化されている。

- ① よい文章とはどんなものか
- ② 文章はどんな働きをするか
- ③ 「書くこと」は何をもたらすか

また、その「文章観」をどう調べるかについては、村井（1997:27）は以下のように述べている。

1. 書かれる文章作品から「書き手」の「文章観」を分析する。
2. 「作文」という題で何が書かれるかをみて、「書くこと（作文）」がどう自覚化されているかを問う。
3. ある作品を「推敲」もしくは「書き直し」たときどう変化するかで「文章観」を推測する。
4. 複数の文章作品を読み比べたとき何をどう評価するかによって「文章観」をうかがう。

以上の調査方法は、大まかに書き手側の立場（1、2、3）と評価側の立場（4）に分けられると考える。本来、ある文章ジャンルにおける文章観を検討するのに書き手の中の文章観を分析するのが一番ふさわしいと思われるが、書き手の文章観についての調査はいまだ客観的基準となる「見方」が成立しているとはいいがたい村井（1999）。そのため、本研究は村井（1999）の研究を踏まえ、「議論文」の評価側の立場から見た「良い作文とは何か」を解くことで、「議論文」の文章観を窺う。

3. 2. 「議論文」における文章観—高考の作文問題の評価基準を中心に

(1) どの段階の「議論文」の評価基準を見るか

中国では「議論文」は小学校の後半で導入され、高考まで指導されることが一般的である⁽⁹⁾。村井（1999）によると、小・中・高（大）のそれぞれの時期における文章の特有な課題があるとされる。具体的には、小学校では入門期とされ、その段階では「文字」の関門や、文章構造のテーマ化と「良い文章」への欲と焦りが中心である。また、中学校になると、「文章観」の動揺が表れ、内面を顧わすことへの抵抗感や不調和に背伸びした表現への無自覚、理屈っぽさと情緒性過多の傾向が生じる。そして、高校に入って、大学までの段階では評価観の固定化と成長期待感の衰えが主である（村井 1999）。つまり、高校生になると、どのような作文が良い作文なのかとの見方が固定化されていく。よって、本研究は、高校段階の「議論文」の評価基準を中心として見ていく。

(2) 何故「評価基準」を中心とするか

前述でも「評価」と「文章観」とのつながりを述べたが、つまり「議論文」の評価基準を分析することで、その背後にある「良い議論文」のあり方が窺えるということである。さらに、大野・荘（2016）では、6名の中国人留学生を対象に、彼らの母国における作文教育の背景についてインタビュー調査が行われ、その中に、「文章をうまく書くのは大事なことだと思うか」という質問が設けられた。その回答は、「文章をうまく書くのは大事である」ことが被調査者全員に共通していた。そして、大事だと思う理由として、「語文の試験の中にいつも作文があり、よい点を取る必要がある」ということが6名の被調査者の内5名も述べていたという。そこで、中国人学習者の「良い議論文とは何か」という文章観は評価基準に大きく影響されることが予測できる。そのため、「議論文」の評価基準、特に高考での作文評価基準を検討する価値があると考えられる。

(3) 高考における「議論文」の評価基準

中国で大学の進学を目指す学生にとって、高考の結果の大切さは言うまでもない。そこで、高考の作文問題について触れておきたい。付（2017）によると、「議論文」と「記叙文」¹⁰⁾の2つの文章ジャンルが主である（筆者直訳）と指摘している。文章のジャンルは複数あるが、北京巻¹¹⁾は特別に「議論文」と「記叙文」の評価基準を分けているが、その以外の地域または全国巻はすべて作文評価基準を表3のように統一している（周・張 2020 により筆者直訳）。

表3 高考作文評価基準（張 2018：71 により筆者作成・直訳）¹²⁾

		一等	二等	三等	四等
		課題に沿う 中心は目立つ 内容は充実 趣旨は健全 感情は真心がこもっている	課題に沿う 中心は明確 内容は比較的に充実趣 旨は健全 感情は真実	基本的に課題に沿う 中心は基本的に明確 内容は薄い 趣旨は基本的に健全 感情は基本的に真実	課題からそれる 中心不明 内容は不適切 趣旨は不健全 感情は不実
基礎等級	内容 20 点				
	表現 20 点	文体は適切 構成は厳密 言葉遣いは流暢 筆跡ははっきり +きちんと	文体は適切 構成は整う 言葉遣いはスムーズ 筆跡はきちんと	文体は基本的に適切 構成は基本的に整う 言葉遣いは基本的にスムーズ 筆跡ははっきり	文体は不適切 構成は混乱 言葉遣いは曖昧 誤用は多い 筆跡はぞんざい
発展等級	特色 20 点	深刻 豊富 文才がある 独創性がある	比較的に深刻 比較的に豊富 比較的に文才がある 比較的に独創性がある	少し深刻 少し豊富 少し文才がある 少し独創性がある	個別の語句は深刻 個別の内容は比較的にいい 個別の語句は比較的に優れる 個別な部分は独創性がある

その妥当性について、紀・李（2016）では「高考の作文評価基準の項目内容は「記叙文」向けの設定に偏っており、「議論文」をどう評価するかという基準が不明瞭である。その原因で、（高考での）「議論文」の採点の誤差が「記叙文」より大きい。」のように指摘されている。ここでは高考の作文評価基準を批判することを目的としていないため、これ以上の議論はしない。そのような評価基準の形成理由は中国の文化背景もあるが、その詳細については今後の課題とする。

「良い議論文」とはどのようなものなのかを検討するためのヒントを得たく、以下、張（2018）（高考における語文科目の評価システムの研究の一環とされた、作文等級評価基準について解釈したものである）による表3の評価基準についての解釈、と『2019年普通高等学校招生全国統一考試大綱』（中国教育部試験センターが発表した高考の出題・評価・受験勉強の基準である）に基づいて、その詳細を考察する。筆者による考察内容は表4の中に盛り込んで記述する。

表4 高考作文評価基準の解釈と考察（張2018と『考綱』をもとに筆者直訳・作成）

等級	項目	下位	解釈（張2018と『2019年普通高等学校招生全国统一考试大纲』をもとに筆者直訳） （下線部は筆者が考察した部分である）	筆者による考察
基本等級	内容 20点	課題	近年の高考では作文の出題形式はほとんど課題文読解型や図式型（図や漫画が読解の資料）になってきている。課題文と図や漫画の読解が難しくなっている。	
		中心	中心は課題を一つの話題にまとめ、その話題をどのように表現していくかということである。中心は課題・文章ジャンル・書き手の違いによって違う現れ方がある。その中、明示的あるいは非明示的な現れ方もあり、 <u>理性的な概括あるいは濃厚な感情という現れ方もある</u> 。	議論文では「論点」と呼ばれ、時には「中心思想」「構想」などと呼ばれる。張（2018）によると、一部の作文では一つの中心しかない、また、その中心の考え・観点が明確的でなければならないと言われている。
		内容	高考での作文における「内容」は「素材」から成り立つ。内容の評価では、素材の量ではなく質によって評価される。そのため、 <u>素材の典型性、現実感、新しさ</u> に注意を払うべきである。	「内容」と「中心」とのつながりが言及されていない。素材への重視度が高い。
		趣旨	趣旨と感情は健全で積極的なものがない。不健全な趣旨や考え方など、特に法に違反し紀律を乱す観点や消極的な内容がよくない。	
		感情	張（2018）では「感情」項目に対する解釈がなく、先行研究の中でも管見の限り見当たらない。	
	表現 20点	文体	高考では作文の文体に対する制限がない。しかし、受験生は作文を書く際、どの文体で書くかという意識を持たなければならない。張（2018）では、作文における表現手法も言及されている。表現手法は以下の5種類がある。 ① 叙述：「叙述」は人物の経歴や事物の発展・変化の過程を記述する表現の仕方である。 ② 描写：「描写」は人物あるいは事物の具体的な外見や見た目を生き生きと描く表現手法である。 ③ 説明：「説明」は簡潔な言葉遣いで事物の各属性を解説する表現手法である。 ④ 議論：「議論」は客観的に存在する事物を分析・評論し、自分の観点・態度を表す表現手法である。 ⑤ 抒情：「抒情」は作文を書く際の最も重要な目的であり、情感が溢れていることと内容が真実であることを基礎として自然に出てくることを求める。	どの文体でどの表現手法を使うべきか、または使わないべきかとの記述がない。 表3と合わせてみると、文体の適切さが要求されるが、表現手法への要求がない。そのため、受験生の作文の中、「議論文」でも、叙述・描写・抒情などの表現手法の混在が十分ありえる。その中、「抒情」という表現手法が重視されていると見られる。

基 本 等 級	表 現 20 点		発 展 等 級	特 色 20 点	
	構 成	意 味 段 落 よ り 形 式 段 落 へ の 重 視 度 が 高 い と 見 ら れ る。 ま た、「強 調 段」「対 話」と い っ た 特 殊 な 段 落 形 式 が 存 在 す る こ と が 見 ら れ る。			
	構 成	構 成 の 評 価 を ま た 2 つ の 尺 度 に 分 け ら れ る。 ① 段 落 分 け と 配 列：形 式 段 落（自 然 段）の 合 理 的 な 段 落 分 け が 作 文 の 基 本 的 な 技 能 で あり、書 き 手 の 考 え 方 の 条 理 性 が 持 っ 証 拠 で あり。 ② 語 段 間 の 処 理：構 成 に 対 す る 評 価 は 段 落 を 基 本 単 位 と す る。そ の 中、段 落 の 繋 ぎ 方・移 行・呼 応 を 注 意 し な け れ ば な ら ない。ま た、語 段 間 の 処 理 に つ い て は、特 殊 な 段 落 に 注 意 を 払 う べ き で あり。そ の 特 殊 な 段 落 と は、段 落 の 形 が あり な が ら、段 落 に な っ て い ない 段 落 で あり、「強 調 段」と「対 話」の 段 落 で あり。「強 調 段」は 一 文 が 一 つ の 段 落 に な る 段 落 で あり、独 立 的 な 段 落 と し て 見 る の で は な く、他 の 段 落 に 属 し て い る 段 落 と し て 見 る べ き で あり。そ の「強 調 段」は 読 み 手 の 印 象 を 深 め る 機 能 を 担 っ て い る。	言 葉 遣 い 「言 葉 遣 い」を さ ら に 3 つ の 尺 度 に 分 け ら れ る。 ① 1 規 範・繋 ぎ・妥 当：規 範 の 有 る 漢 字・句 読 点、な ど が 書 け、正 し い 文 法 が 使 え る。句 と 句 の 繋 ぎ が 順 調 で あり。言 語 環 境・社 会 環 境 に ふ さ わ し い 書 き 方 で あり。 ② 言 葉 遣 い の レ ベ ル：3 つ の 面 か ら 考 察 す る こ と が で き る：ま ず は 言 葉 遣 い の 層 が 多 い こ と（表 現 す る 時、文 の 中 の 情 報 を 累 加 や 付 加 し、ま た は 従 属 節 を 増 や す な ど の 手 法 を 使 い、文 の 長 さ を 長 く し、ま た、複 文 群 を 作 る）。そ し て、情 報 量 が 多 い こ と（少 な い 言 葉 で 多 け れ ば 多 い ほ ど の 内 容 を 表 す こ と が 良 く、効 果 も い い）。最 後 は、抽 象 度 が 高 い こ と（抽 象 度 が 高 い け れ ば 高 い ほ ど 評 価 さ れ る の で は な い）。 言 葉 遣 い の ス タ イ ル：言 葉 遣 い の ス タ イ ル は 個 人 差 が 大 き い 項 目 で あり、質 朴・謹 慎・派 手・含 蓄・ユ ー モ ア・大 胆 な ど が 有 る。そ の 中、今 の 教 育 現 場 や 高 考 で の 評 価 で は 派 手 な 言 葉 遣 い と い う ス タ イ ル が 評 価 さ れ て い る。	大 量 な 情 報 を 含 め た 複 雑 な 長 文 が 評 価 さ れ る こ と が 見 え る。派 手 な 言 葉 遣 い が 評 価 さ れ る と い う こ と が 見 え る。	
	筆 跡	「筆 跡」と い う 項 目 に つ い て の 解 釈 が 言 及 さ れ て い ない。			
	深 刻 さ	① 現 象 を 通 し て 本 質 を 見 る。② 問 題 の 元 を 解 く。③ 示 唆 を も た ら ず 観 点 が 有 る		深 刻 さ を ア ピー ル す る た め、大 き な 話 題 の 取 り 上 げ・定 義 付 け が 出 る 可 能 性 が 高 く な る。	
	豊 富 さ	① 豊 富 な 素 材。② イ メー ジ は 湧 き や す い。③ 意 味 深 い		「内 容」下 位 項 目 で は 素 材 の 質 を 重 視 し て い る。こ こ で の 素 材 の 豊 富 さ と は 呼 応 関 係 に な っ て い る だ ろ	
	文 才	① 言 葉 遣 い は 生 き 生 き し て い る、文 型 は 多 様 で あり。② 修 辞 技 法 が う ま く 運 用 で き る。③ 含 意 す る。		こ こ で も「言 葉 遣 い」を 言 及 し て い る。「美 し い」表 現 へ の 関 心 度 が 高 く 見 え る。	
独 創 性	② 見 解・素 材 が 新 し い。② 構 想 が 精 巧。③ 推 論・想 像 が 独 創 的 で あり。④ オ リ ジ ナ リ ティ が 有 る。		ま た 素 材 に つ い て 言 及 さ れ て い る。		

3. 3. 「議論文」の評価基準から見られる「良い議論文」とは何か

以上の「議論文」の評価基準及びそれに対する解釈を検討した上で、本節では「良い議論文」のあり方を考える。表4の考察によれば、「良い議論文」には該当するが、必ずしも「良い意見文」にはならないと考えられる評価基準がある。それについて、以下のようにまとめる。

- ① 内容面、豊富さの面、独創性の面では素材が重視される。素材の多さと新しさなどを際立たせることが「良い議論文」の必須項目になると言えよう。その点については、大野・荘（2016）ではインタビューを通して、生徒（中国人学生）は高評価を得るために参考書の類（優秀作文集・素材集（よい作文を書くために役立ちそうな材料、題材を集め、それぞれの扱い方、生かし方を解いたり示したりする参考書のこと）・引用辞典）を大いに活用していることを指摘している。
- ② 言葉遣いに関する評価基準がこと細かく述べられており、綺麗な言葉遣いが「良い議論文」の必須項目になっていることがわかる。その点についても、大野・荘（2016）では、中国人学生は美しい表現を用いて書こうと努力すること、古典などの引用が教養を示すことで重要だと考える傾向があると指摘されている。
- ③ 「文体」の項目では「抒情」は作文を書く際の最も重要な目的であると述べられており、「抒情」という表現手法が「良い議論文」に多く用いられていると考えられる。また、「中心」の項目では中心の現れ方について、濃厚な感情を表す表現が「中心」として認められる。そのような現れ方も「抒情」という表現手法の一種であろう。いわゆる、「良い議論文」では「濃厚な感情を表す文」が「中心」にされる可能性がある。
- ④ 一文が一つの段落になる「強調段」は読み手に強い印象を与える機能があるため、「良い議論文」に多く出現する可能性がある。

3. 4. 「良い議論文」の文章観を用いて「良い意見文」を書こうとする際の問題点

以上の「良い議論文」の認識のもと、「良い意見文」を書くと、以下のような問題が生じると考えられる。これが中国人学習者の文章観と日本語母語話者の文章観とのギャップにつながるであろう。

- ① 「意見文」において最も重要である「主張」という項目が議論文の評価基準には現れていない。高考の評価基準では「中心」という項目があるが、張（2018）によると、中心は議論文では「論点」と呼ばれ、時には「中心思想」「構想」と呼ばれる（筆者直訳）。つまり、この中心は「主張」より、「主旨＋主張」のようなものだと考えられる。そのため、ここでの「中心」は「意見文」での「主張」と同じものであると言いがたい。中国人学習者が「意見文」の「主張」を「議論文」の「中心」とであると認識した場合、彼らの意見文での主張も非明示的または濃厚な感情の文という現れ方になる可能性がある。
- ② 「意見文」では「主張」のサポートとなる「根拠」も重視される。それに対して、議論文の

評価基準では「根拠」についての言及がない。その代わりに、議論文の評価基準では素材への重視度が高く、特に素材の豊富さや新しさなどが重視される。しかし、その素材と議論文の中心とのつながりについては言及されていない。そのため、中国人学習者がその観点で意見文を書くと、大量な事例の引用になったり、意見文における主張と根拠とのつながりが薄くなったりする可能性が高い。

- ③ 「議論文」では「抒情」という表現手法が重視されているため、中国人学習者がその観点で意見文を書いた場合、抒情性が重視されたものになりやすい。つまり、客観的な事実や根拠を述べるべきところで抒情的な文を書いてしまう可能性がある。その場合、意見文の客観性が希薄になると考えられる。
- ④ 一文が一つの形式段落になる「強調段」が「議論文」では読みやすさにつながる。一方、「意見文」では「強調段」は、段落分けの意図がわかりにくくなり、筆者の意図が理解されにくい。

次節では、実際に中国人学習者が書いた日本語の意見文を分析し、このような問題点が現れるかを分析する。

4. 中国人学習者の意見文は「議論文」における文章観からの影響を受けたか

本節では、実際に中国人学習者が書いた意見文は「議論文」の文章観からの影響を受けているかについて述べる。「良い議論文」の特徴は実際に「意見文」に現れるかの解明」を入り口として、作文調査を行った。

4. 1 【作文調査】の概要

表 5 作文調査の調査概要⁽¹³⁾

	機関 A	機関 B
時期	2015 年 3 月	2016 年 9 月
対象	中国の機関 A の外国語学部で日本語を専攻している 2 年生 29 名、3 年生 28 名	中国の機関 B の外国語学部で日本語を専攻している 3 年生 14 名、4 年生 13 名
調査形式	対象者に同一の課題文を与え、教室内で 30 分内 600 字の作文を書いてもらった。	
課題文 ⁽¹⁴⁾	今、世界中で、インターネットが自由に使えるようになりました。ある人は「インターネットでニュースを見ることができるから、もう新聞や雑誌はいらない」と言います。一方、「これからも、新聞や雑誌は、必要だ」という人もいます。あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください。	

表 6 作文調査における被調査者の内訳

通し番号	意見文とは何か	日本語学習暦
I-1	自分の意見を述べる文章	29 ヶ月
I-2		30 ヶ月
I-3		17 ヶ月
I-4		17 ヶ月
I-5		17 ヶ月
II-1	議論文	31 ヶ月
II-2		30 ヶ月
II-3		18 ヶ月
II-4		18 ヶ月
II-4		2 年 7 月
III-1	わからない	2 年 7 月
III-2		2 年 6 月
III-3		1 年 6 月
III-4		1 年 9 月
III-5		1 年 9 月

4. 2 【作文調査】の分析手順

- (1) 2 節で述べた【認識調査】における設問②「意見文とは何か」の回答結果に基づいて、3 つのグループを分けた。「グループⅠ. 自分の意見を述べる」「グループⅡ. 意見文＝議論文」「グループⅢ. わからない」である。
- (2) それぞれのグループからランダムで 5 篇の作文、計 15 編を抽出し、コーディング化する。
- (3) それぞれのグループの意見文においては「議論文」の問題点が現れたかを分析する。本調査では「意見文」の最も重要である「主張」の部分に着眼し、以下の 2 点について考察を行う。
 - ① 主張は明示的あるいは非明示的であるかを分析する。
 分析の際、石黒（2017）を参考に、データの意見文を「頭括型」（主張が文章の開始部に現れる）、「両括型」（主張が文章の開始部と終了部に現れる）、「尾括型」（主張が文章の終了部に現れる）、「分括型」（主張が文章の 2 か所以上に分散している）、「非明示型」（石黒（2017）では「潜括型」であるが、ここでは主張が潜在しているかどうかを分析しなく、主張が現れたかどうかを分析するため、「非明示型」を使う）の 5 つの文章型に分ける。
 - ② 「議論文」の特徴的なものとも言える「強調段」が現れるかを検討する。

4. 3 【作文調査】結果

表 7 「主張」の現れる位置

	グループ I	グループ II	グループ III	合計	割合
両括型	1	0	2	3	20%
尾括型	2	1	1	3	20%
非明示型	2	4	2	9	60%
合計	5	5	5	15	100%

表 8 「強調段」の出現数

	強調段数
グループ I	3
グループ II	1
グループ III	5
合計	9

表 7 からは、3 グループにおいては、「主張」が非明示的であるデータは 9 編 (60%) であり、データの 60% を占めていることがわかった。その中、とくに「グループ II : 意見文 = 議論文」では 5 篇の中 4 篇も非明示型であった。

また、表 8 では、15 編のデータ意見文の中、「強調段」は 9 段落も現れていることがわかった。その出現数だけを見ても少なくないと言えるだろう。しかし、本調査のデータ量が少ないこと、また、それぞれの文章の段落数も差があるため、「強調段」の出現率に関する考察は割愛する。その代わりに、どのような「強調段」が現れたかについて考察する。

以下は作文データに見られた「強調段」の例である（下線部が強調段である）。

① 「強調段」が意見文の冒頭部に出る例⁽¹⁵⁾

グループ I -4

私は新聞や雑誌が必要だと思います。

電子書籍は長所があるでも短所もたくさんあります。例えば、それはいつも見られる。しかし、それには広告や誘惑が多い。悪い情報は良くない影響を生む、また嘘の情報が同じです。(後略)

② 「強調段」が意見文の中心部に出る例

グループ I -3

(前略) 電子書籍より、紙の本は一つ長所がある。永久保存することができる。何度も、何度も紙の本を読めます。

紙の本を読む時期、式感があるから、本を意味を考えやすいです。

私は、インターネットでニュースと本を読む時期、よく広告が突然現れます。(後略)

③ 「強調段」が意見文の終了部に出る例

グループⅠ-2

(前略) もし、ある月、市場で販売されている新聞や雑誌を売らないことになったら、長く存在するものがなかった。寂しくなると思わないのか。

もし、私老後の生活は余裕があったら、紙で印刷された文字をちゃんと味わっていきたい。

グループⅡ-2

(前略) そして、紙の本は「深読み」のキャリアーとして、それを読者にもっと深く読んで投入し、文字の美しさを提供することができるだけではなく、もっと書籍の装訂、設計や質感、印刷がもた墨香の全体美しい雲域を造っています。

つまり、紙質書の読むのは本真に知識を獲得できるということです。

グループⅢ-1

(前略) 以前、科学がそんなに発達しないとき、ニュースを伝えるの方法としてはそのニュースを紙に載せて配ります。今の新聞や雑誌は紙に印刷して、以前と同じの方法でニュースを伝えます。

だから新聞や雑誌は伝統文化を伝承したの手段です。

現代にとって不可欠なものです。

グループⅢ-3

(前略) 最後は、ある人はコンピューターがありません。同時に、ある人はコンピューターの使う方ができません。伝統的には、毎朝新聞を読む。朝ご飯を食べる。それは美しい日の起点。思うに、そんな活動は重要なことですね。そのままでは毎日を充実して暮れています！

「蓼食う虫も好きぐき」といいますが、新聞や雑誌は必要ですね！

グループⅢ-4

(前略) 一方、電子書籍やニュースなどのインターネットの使うの短所があります。例えば、嘘の情報かもしれないし、インターネットの使うの費用が多いし、だらだらと長時間見てしまうので目が悪くなります。そして、広告や誘惑が多いです。これらは私たちの健康成長には不利ではないです。

だから、私は紙の本はもっと必要だと思います。

以上の例から、「強調段」は意見文の終了部に出現する傾向が見られた。「強調段」は読み手に対する読みやすさを目的としつつ、書き手の主張を強調する際に用いられていることがわかった。その例として、「グループⅠ-4」、「グループⅢ-4」、「グループⅡ-2」のような直接的に「必要(だ)と思います」との主張を出す例、および「グループⅢ-1」のような「不可欠なものです」と間接的に自分の主張を出す例が見られた。そして、「グループⅠ-3」のような根拠を示す段落を「強調段」の形で表す例、「グループⅠ-2」のような書き手の気持ちを表す例、「グループⅡ-2」のような結論を表す例も見られた。もちろん、日本母語話者の意見文では「強調段」がないわけではない。ここでは、中国人学習者と日本語母語話者の意見文における「強調段」

の相違を議論するのではなく、中国人学習者の意見文における「強調段」の出現の理由を検討する。つまり、その理由は「議論文」の文章観からの影響の可能性が高いのである。

以上の中国人学習者の意見文における「主張」および「強調段」の考察から、中国人学習者の意見文には「議論文」の特徴が出ていることがわかった。とくに、意見文に対する認識が違っているにもかかわらず、3つのいずれのグループからも「議論文」の文章観における特徴が現れた。もちろん、そのような特徴があったとしても、それは全て「議論文」の文章観からの影響であるとは言い切れない。しかし、中国人学習者の中には「議論文」の文章観を持っている学生が存在していること、そして、その文章観が意見文に影響を与えていることは否めないだろう。

本調査のデータ量は、中国人学習者の意見文が「議論文」の文章観からの影響を受けていることを証明するには不十分であるが、その可能性があることは言えるだろう。本調査では「主張」と「強調段」の考察を中心に行ったが、他の特徴については今後の課題とする。

5. まとめ

本研究では、中国人学習者の意見文における文章レベルのわかりにくさの原因を解明するために、その基礎的な研究として、中国人学習者の文章観を考察した。

本研究の考察では、まず、「意見文」に対応する中国の文章ジャンルについて、中国人学習者を対象に認識調査を行った。その結果、先行研究で散見された「意見文＝議論文」という認識が確認された。その認識を持つ被調査者は調査対象者の3割程度であり、意見文と議論文を同一視する傾向があるとまでは言えないが、その認識の妥当性について検討する必要があると考えた。

そして、「意見文＝議論文」という認識が妥当であるかを検討するために、「良い議論文とは何か」について高考の作文問題の評価基準の考察を行った。考察の結果、「良い議論文」の特徴として、素材への重視度が高いこと、綺麗な言葉遣いが望ましいこと、「抒情」という表現手法が重視されること、一文が一つの形式段落になる「強調段」が現れることがわかった。それらの特徴を「意見文」に当てはめると、必ずしも「良い意見文」になるとは限らない。それは、中国人学習者の文章観と日本語母語話者の文章観の間のギャップと言えよう。

そこで、本研究は、中国人学習者の意見文は「議論文」の文章観からの影響を受けたかどうかを確認するため、作文調査を行った。その結果、中国人学習者の意見文における「主張」の非明示、及び「強調段」の出現という2点で、「議論文」の文章観からの影響を受けた可能性が高いことがわかった。作文調査では「主張」と「強調段」以外の「良い議論文」の特徴については分析ができなかったが、それは今後の課題とする。

本研究の調査、分析、考察から、中国人学習者の意見文は「議論文」の文章観からの影響を

受けている可能性は否めない。したがって、中国人学習者を対象とした教育現場では、「議論文」という文章観が影響しているということを念頭に指導を行う必要がある。今後の課題としてデータ量を増やし、「議論文」の文章観が中国人学習者の意見文にどのような影響を与えているかを分析していく。

注

- (1) 公益社団法人日本語教育学会によって刊行された学会誌である。
- (2) 日本の「国語」に相当する。
- (3) 「意識」という言葉が多く使われている。しかし、本研究は、中国人学習者が「意見文」をどのように理解しているかだけでなく、「意見文」を自分の中のどの文章ジャンルと関連づけているかをも検討する上で、中国人学習者なりの「意見文」の枠を見る。そのため、「認識」という言葉を使う。
- (4) 中国の湖南省における都市部の総合大学である。
- (5) 中国の湖南省における都市部の総合大学である（機関 A と違う大学である）。
- (6) 中国における大学の日本語学科（学部生）では 1 年生・2 年生を前半、3 年生・4 年生を後半のように分けるのが一般的である。そのため、本調査は 2 年生と 3 年生を調査対象とした。なお、2 回目の調査の実施時期は中国の一学年の新学期のはじめだったため、当時の 3 年生は 2 年生と同じレベルであり、4 年生は 3 年生に相当することである。したがって、2 回目の調査対象者を 3 年生と 4 年生に設定した。
- (7) 「」をつけた際、「意見文」と「議論文」を文章ジャンルとして扱うことを意味する。
- (8) 中国の大学入試のことである。全称は「普通[高]等学校招生全国統一[考]試」である。
- (9) 中国の教育部制定の「課程標準」（日本の学習指導要領に相当する）によって決まる。
- (10) 鄭(2018)によると、「60 年代以降、(中国の)作文教育の内容中心が文種の学習になり、各文章の文種は記叙文、説明文、議論文に限られるようになった。その中「記叙文」は記述や叙述の表現手法を用いた文種で、主に『人物を描写する』文章と『事件を記述する』文章に分けられている。」と解釈される。
- (11) SciencePortal China: https://spc.jst.go.jp/experiences/education/education_1903.html (2020 年 10 月 6 日確認)
 高考の試験用紙の分類 (2018 まで) は以下のようになっている。
 - ① 「全国Ⅰ（甲）巻」9 地区
 河南省、河北省、山西省、江西省、湖北省、湖南省、広東省、安徽省、福建省
 - ② 「全国Ⅱ（乙）巻」11 地区
 甘肅省、青海省、内モンゴル自治区、黒竜江省、吉林省、遼寧省、寧夏回族自治区、新疆ウイグル自治区、チベット自治区、陝西省、重慶市
 - ③ 「全国Ⅲ（丙）巻」4 地区
 雲南省、広西省、貴州省、四川省
 - ④ 「○○省巻」5 地区
 海南省：全国Ⅱ（乙）巻（国語、数学、英語）＋独自出題（政治、歴史、地理、物理、化学、生物）
 山東省：全国Ⅰ（甲）巻（外国語、文系総合、理系総合）＋独自出題（国語、文系数学、理系数学）
 江蘇省：独自出題（全科目）
 北京市：独自出題（全科目）（「議論文」と「記叙文」を分けて評価する）
 天津市：独自出題（全科目）
 その中、「○○省巻」の出題側は各省にあり、「全国巻」の出題側は中国教育部考試中心（日本語訳：中国教育部試験センター）である。
- (12) 中国教育网によって公開された『2019 年普通高等学校招生全国統一考試大綱』における「語文」の「写作（作文）」の部分参考に、張（2018）の作文評価基準と合わせて表 3 を作成した。
 『2019 年普通高等学校招生全国統一考試大綱』：
<http://gaokao.nceea.edu.cn/html1/report/19012/5786-1.htm> (2020 年 10 月 6 日確認)

- (13) 機関 A と機関 B は表 1 の【認識調査】の同一機関である。
 (14) 日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文データベース 2011 の課題文を使用した。
 (15) データの文法・語彙・表記などの間違いを修正せずに記述している。

参考文献

- 石黒圭 (2017) 「日本語学習者の作文における文章構成と説得力の関係」『一橋大学国際教育センター紀要』(8) pp.3-14
- 大野早苗・荘巖 (2016) 「インタビュー調査からみる中国人留学生が母国の学校教育で学んできた文章の書き方について—作文参考書の利用を中心として—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』8.pp.74-82
- 大野早苗 (2019) 「日本人学生と中国人学生の母語による意見文の構成の違い」『月刊 国語教育研究』(564) pp.42-49
- 木戸光子 (2020) 「上級日本語作文の誤用の文章構造分析の意義」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』(35) pp.1-12
- 鈴木一史・内川美佳 (2013) 「意見文作成における語彙および文型提示の教育的効果」『茨城大学教育実践研究』(32) pp.17-31
- 前川孝子 (2020) 「中国人日本語学習者は意見文をどのようにとらえているか—中国での質問紙調査から—」『日本語教育方法研究会誌』26 巻 2 号 pp.72-73
- 水谷信子 (1997) 「作文教育」『日本語教育』(94) pp.91-95 日本語教育学会
- 村井万里子 (1999) 「文章表現指導の基礎的研究：『文章観』をどう捉えるか」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』97(0)pp.26-27
- 吉田美登利 (2004) 「日本語作文の読み手意識について—中国人学習者と日本人大学生の場合—」『学習院大学人文科学論集』(13) pp.23-47
- 脇田里子 (2005) 「文章構造の可視化に着目した日本語学習者のための作文教育支援」『言語処理学会年次大会発表論文集』(11) pp.456-457
- 付胜云 (2017) 「议论文写作教学问题根源摭谈」《写作》(2017-1) pp.38-59
- 黄国山 (2018) “头脑风暴法在日语议论文写作教学中的运用”《吕梁教育学院学报》35(4)pp.110-112
- 纪荣海・李军 (2016) “关于高考议论文评分标准的新构想”《中国考试》(10) pp.20-24
- 张开 (2018) “高考作文评分‘基础等级’重要指标分类及解读”《中学語文教学》(2018-01) pp.71-77
- 周群・张开 (2020) “开发具有文体倾向高考作文评分标准的必要性”《中学語文教学》(2020-01) pp.63-67